

欲望とイメージ

バルザック『谷間の百合』からフローベール『感情教育』へ¹

木内 堯

はじめに

バルザックはサント＝ブーヴの『愛欲』に対抗して『谷間の百合』を書いたと伝えられている。二人の共通の友人であるジュール・サンドーの証言に依拠しつつ、サント＝ブーヴが書き残しているところによれば、この批評家を書いた『絶対の探求』の辛辣な書評を読んで激怒したバルザックは、その復讐として、『愛欲』を書き直すことを決意したのだという²。もともと、批判的な書評に対する意趣返しという、そんな目的のためだけに、バルザックが一編の小説を書いたとは考えづらい。しかし、この二つの小説が似通った題材を扱っていることは、紛れもない事実だ。いずれの小説においても、青年と既婚女性のプラトニック・ラブが描かれているのである。『谷間の百合』におけるフェリックスとモルソフ夫人の恋愛関係は、『愛欲』におけるアモリーとクアエン夫人の恋愛関係を、想起させずにはおかない。

バルザックの『谷間の百合』がサント＝ブーヴの『愛欲』を書き直したものであるとすれば、フローベールの『感情教育』はバルザックの『谷間の百合』を書き直したものであると言えるだろう。フローベールが『感情教育』の初期のプランに、「『谷間の百合』に気をつけること³」と書き込んでいた

¹ 本論文は、以下の論文と対を成す。木内堯、「セナークルの物語 バルザック『幻滅』からフローベール『感情教育』へ」、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、第46号、2013年。

² 「『両世界評論』のこの記事がバルザックのもとに届けられたとき、ジュール・サンドーはそのそばにいたと、私に一度ならず語ってくれた。この大作家は、完全に好意的な称賛の記事を期待して、自ら声に出して読み始めた。最初の数ページにはたいして気を悪くすることなく、まずまずの上機嫌で読み進めていった。しかしまもなく表情に陰りが見えた。『評論』を投げ捨てて、怒りに震えて叫んだ。「このツケは払わせる。俺のペンであいつの体を串刺しにしてやる。」そして復讐の仕上げとしてこう付け加えた。「俺は『愛欲』を書き直す。」この小説は出版されたばかりだった。」(Sainte-Beuve, *Portraits contemporains*, édition établie, préfacée et annotée par Michel Brix, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, « Mémoire de la critique », 2008, p. 688.)

³ Carnet 19, n° 36 (Gustave Flaubert, *Carnets de travail*, édition critique et génétique établie

ことは、よく知られている。この書き込みは、フローベールが自らの小説とバルザックの小説の類似に意識的であったことを、雄弁に物語っている。実際、この二つの小説は、青年と既婚女性の恋愛関係が描かれているというだけでなく、精神的な恋愛と肉体的な恋愛が対比的に扱われているという点においても、共通している。

本論では、『感情教育』と『谷間の百合』の比較を試みたい。両作品の類似と差異を明確にすることによって、フローベールが過去の作品との対話の中からどのようにして新しい作品を生み出したのかを明らかにすることが、本論の目的である。『感情教育』と『谷間の百合』の比較はすでにアンドレ・ヴィアルによって試みられているので⁴、本論では、恋愛の主題、とりわけ精神的な恋愛と肉体的な恋愛の対立という図式に、注目することにしよう。また、精神的恋愛と肉体的恋愛の対立という問題に関しては、ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』も併せて参照することにした。というのは、『感情教育』において二種類の異なる恋愛を描くにあたって、フローベールはバルザックの『谷間の百合』だけでなくルソーの『告白』も参考にしてきたからである。

最初に、「『谷間の百合』に気をつけること」という言葉の持つ意味を明らかにし、つづいて、ルソーの『告白』を参照することにした。その上で、最後に再び、『感情教育』と『谷間の百合』の比較に戻ることにしよう。

1. 「『谷間の百合』に気をつけること」

最初の出会い

『感情教育』と『谷間の百合』の共通点は、まずは何と言っても、人生の門出に立ったばかりの青年と年上の既婚女性の恋愛関係を題材としているということである。『感情教育』におけるフレデリックとアルヌー夫人の関係と『谷間の百合』におけるフェリックスとモルソフ夫人の関係は、よく似ている。また、この二つの小説は、理想的な女性との出会いによって、青年の世界観が大きく変容するという点においても、共通している。それぞれの小

par Pierre-Marc de Biasi, Balland, 1988, p. 290).

⁴ Voir André Vial, « Flaubert, émule et disciple émancipé de Balzac : *L'Éducation sentimentale* », dans *Faits et significations. Musset, Hugo, Baudelaire, Verlaine, Balzac, Sainte-Beuve, Flaubert, Maupassant*, Nizet, 1973, p. 93-98. アンドレ・ヴィアルは、同書に収められた「*De Volupté à L'Éducation sentimentale. Vie et avatars de thèmes romanesques*」と題する論文で、『感情教育』と『愛欲』の比較も試みている。

説において、理想的な女性との出会いがどのように描かれているのかを、まずは見てみることにしよう。

『谷間の百合』は書簡体小説であり、フェリックスが恋人ナタリー・ド・マネルヴィルに宛てた長大な手紙がその大部分を占めている。この手紙の冒頭で、フェリックスは孤独な少年時代を振り返る。少年時代の彼は、寂しさのあまり、ロワール川に身投げしようとしたことさえあったという（このエピソードは『感情教育』においてフレデリックがセーヌ河岸で自殺の衝動に駆られる場面としばしば比較される⁵）。

ところが、ある女性との出会いによって、フェリックスの人生は一変する。アングレーム公の歓迎のためにトゥールで開かれた舞踏会に出席したフェリックスは、そこで見知らぬ女性に一目惚れし、そしてその出会いによって、自分がまるで生まれ変わったかのように感じるのだ。「僕はすっかり変貌して眠りに帰りました⁶。」しかしこのとき、フェリックスの「変貌」はまだ完全なものではない。

舞踏会の数日後、フェリックスは、見知らぬ女性が住むクロシュグールドを偶然にも訪問し、彼女と再会を果たす。そして、この女性がモルソフ伯爵という「亡命貴族」の妻であることを知る。フェリックスの「変貌」が完全に完全なものになるのは、この偶然の再会のあとのことである。

その前の数日のあいだに僕にとって世界が大きく広がったとすれば、一夜にしてその世界は中心を持ったのでした⁷。

モルソフ夫人との出会いは、フェリックスが自然に向ける眼差しを変容させる。モルソフ夫人の住む土地の風景、より具体的に言えば、アンドレ川の谷間の風景に、フェリックスは心を奪われるようになるのだ。もちろん、アンドレ川の谷間の風景が魅力的に映ずるのは、そこにモルソフ夫人が住んでいるからに他ならない。モルソフ夫人は「この谷間の百合⁸」であり、彼女は「この谷間を「その美德の香り⁹」で包んでいると、フェリックスには感じられ

⁵ Voir André Vial, art. cit., p. 85.

⁶ Honoré de Balzac, *Le Lys dans la vallée*, texte présenté, établi et annoté par Jean-Hervé Donnard, dans *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. IX, 1978, p. 985.

⁷ *Ibid.*, p. 1013.

⁸ *Ibid.*, p. 987.

⁹ *Idem.*

る。愛する女性と彼女が住む土地のあいだに、一種の照応関係が成立していることに、注意しておきたい。

『感情教育』においても、『谷間の百合』と同じように、理想の女性との出会いが青年の人生に決定的な変化をもたらす。フレデリックも、アルヌー夫人との最初の出会いのあとで、自分が生まれ変わったかのように感じるのである。興味深いのは、主人公の「変貌」を描くにあたって、フローベールがバルザックとほとんど同じ表現を用いていることである。

世界が突如として大きく広がった。彼女は輝かしい点であり、万物がそこへ向けて収斂していた […] ¹⁰。

『感情教育』のこの一節と先に引用した『谷間の百合』の一節は、驚くほど似通っている¹¹。いずれの場合においても、青年の世界観の変化が、「世界の拡大」と「その中心の形成」という二つの動きによって表現されているのである。まるで、フローベールは主人公の変化を描くにあたって、バルザックの小説からイメージを借用してきたかのようだ。

また、フェリックスと同じように、フレデリックも、愛する女性と彼女が住む土地のあいだに、一種の照応関係を見て取るようになる。フェリックスにとって、モルソフ夫人とクロシュグールドが分かち難く結びついていたように、フレデリックにとって、アルヌー夫人とパリの街は切っても切れない関係になるのである。

パリという街が彼女の存在と関わりを持っていて、この大都市は、そこから発せられるすべての声とともに、まるで巨大なオーケストラのように、彼女を中心に鳴り響いていた¹²。

このように、どちらの小説においても、理想的な女性との出会いが、青年が世界へ向ける眼差しを大きく変容させる。愛する人の存在によって、それまで混沌としていた世界に、調和が生み出されるのだ。

¹⁰ Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, édition présentée et annotée par Pierre-Marc de Biasi, Librairie Générale Française, « Le Livre de Poche classique », 2002, p. 53.

¹¹ アンドレ・ヴィアルの論文では、この類似は取り上げられていない。

¹² *L'Éducation sentimentale*, p. 134.

精神的恋愛と肉体的恋愛

『感情教育』と『谷間の百合』のもうひとつの重要な共通点は、精神的な恋愛と肉体的な恋愛が対比的な形で描かれているということである。『感情教育』においてアルヌー夫人とロザネットが形作るコントラストは、『谷間の百合』においてモルソフ夫人とダドレー夫人が形作るコントラストを、想起させさせる。二つの小説において、精神的恋愛と肉体的恋愛の対立がそれぞれどのように扱われているのかを、つづいて見ていくことにしよう。

『谷間の百合』の主人公フェリックスは、モルソフ夫人とダドレー夫人という対照的な二人の女性と、恋愛関係を持つ。モルソフ夫人は、横暴な夫にも献身的に仕える、貞淑な女性であるのに対し、ダドレー夫人は、己の欲望に従って生きる、享乐的な女性である。また、フェリックス自身、モルソフ夫人は「魂の伴侶¹³」であり、ダドレー夫人は「肉体の愛人¹⁴」であると述べているように、前者との関係は精神的恋愛であるのに対し、後者との関係は肉体的恋愛であると、区別することがひとまずは可能である。

貞淑なモルソフ夫人と享乐的なダドレー夫人という、この二人の登場人物の対比は、一見したところ、きわめて単純なものに見える。しかし、この単純さは、実は見せ掛けのものに過ぎない。なぜなら、この二人の女性はその何れもが、相手の女性と入れ替わりたいという欲望を抱いているからだ。

まず、ダドレー夫人はモルソフ夫人に対して激しい嫉妬心を抱いており、もし出来るものならば、彼女と立場を替わりたいとさえ願っている。フェリックスはモルソフ夫人に次のように述べる。

[...] あなたは私の心を独占していますが、あの人は私の肉体しか所有していません。彼女はそれを知っていて、絶望しているのです。あの人はあなたと喜んで役割を交替するでしょう、その交替の代償としてたとえどんな残酷な苦しみも課されるのだとしても¹⁵。

同じように、モルソフ夫人もダドレー夫人に嫉妬しており、彼女のように自由に振る舞いたいという秘めた欲望を抱いている。死を前にして、モルソフ夫人はフェリックスに次のように述べる。

¹³ *Le Lys dans la vallée*, p. 1146.

¹⁴ *Idem.*

¹⁵ *Ibid.*, p. 1159.

あなたをもう逃さないわ！ 私は愛されたい、ダドレー夫人のように無茶なことだってするわ。上手にマイ・ディーって言えるように、英語だって勉強する¹⁶。

貞淑な女性が享樂的な女性と入れ替わりたいという秘めた欲望を抱く。これこそがおそらく、バルザックが『愛欲』を「書き直す」にあたって、最も強いこだわりを持っていた点ではないだろうか。その証拠に、バルザックはハンスカ夫人に宛てた手紙において、『愛欲』について論じながら、この小説のヒロインが血肉を欠いた存在であることを批判している。

そうです、青春の幻想を抱えて出会う最初の女性は、何か神聖で崇高な存在です。残念なことにこの本には、あの挑発的な冗談、フランスにおいて情熱の在り処を示すあの軽率さが、見当たりません。これは清教徒の本なのです。クアエン夫人はあまり女らしくありません。そこには危険が存在していません¹⁷。

フェリックスにとってモルソフ夫人がそうであるように、アモリーにとってクアエン夫人は「何か神聖で崇高な存在」である。しかし、モルソフ夫人と異なり、クアエン夫人はけっして、肉体的な欲望に苛まれることはない。それゆえにそこには、「危険」が存在していないのだ。『谷間の百合』においてバルザックが描こうとしたのは、まさにこの「危険」に他ならない。クアエン夫人に負けず劣らず、モルソフ夫人も貞淑であることは間違いない。しかし、クアエン夫人がけっして知らなかったような肉の疼きに、モルソフ夫人は苦しんでいるのである。

『感情教育』では精神的恋愛と肉体的恋愛の対立はどのように扱われているのだろうか。フローベールは小説構想の初期の段階から、対照的な二人の女性を登場させることを考えていた。たとえば、初期のプランのひとつに、「二人の女、貞淑な女と淫らな女¹⁸」と書き付けている。この二人の登場人物がアルヌー夫人とロザネットに対応していることは明白だろう。また、この初期のプランにおいて、二人の女性は社会的地位によっても明確に区別されている。フローベールはこの二人の女性を「ブルジョワ女と娼婦¹⁹」と形容しているのだ。モルソフ夫人とダドレー夫人は二人とも貴族階級に属して

¹⁶ *Ibid.*, p. 1203.

¹⁷ Lettre de Balzac à Mme Hanska du 25 août 1834 (*Lettres à Madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Robert Laffont, « Bouquins », t. I, 1990, p. 186).

¹⁸ Carnet 19, f° 36 (*Carnets de travail*, p. 290).

¹⁹ *Idem.*

いたのに対し、アルヌー夫人とロザネットは社会的身分が異なるということに、注意しておこう。

フローベールはこのように、小説構想の初期の段階においてすでに、「貞淑なブルジョワ女」と「淫らな娼婦^{コレット}」という対照的な二人の女性を登場させることを決めていた。しかし、それと同時に指摘しておかなければならないのは、フローベールがこの初期のプランにおいて、二人の女性の対立関係を転倒させているということだ。

彼女はついに発狂し、ヒステリーになる。夫は、優しくなって、彼女の面倒を見る。〈フレデリックは夫婦を見捨てる。〉娼婦は、貞節で敬虔な、田舎の城館の女主人になる。モロー夫人は反対に、度を越した美徳の結果、すべてを否認する。

[…]

『谷間の百合』に気をつけること²⁰。

二項対立を作った上で、それを転倒させるというのは、小説の構想段階においてフローベールがしばしば用いる手法である。たとえば、『ハレル・ベイ』と題する作品では、同時代のオリエンを舞台に「文明化する野蛮人²¹」と「野蛮化する文明人²²」を並行して描くことを企図していた²³。それと同じように、『感情教育』のこの初期のプランにおいても、「貞淑なブルジョワ女」と「淫らな娼婦^{コレット}」という対立関係を転倒させている。

ここでもう一つ見逃してはならないのは、このプランにおけるモロー夫人（完成稿のアルヌー夫人に対応する）の末路が『谷間の百合』におけるモルソフ夫人の最期と酷似しているということである。モルソフ夫人が死の床で錯乱し、それまで守りつづけてきた貞節を否定するかようなことを口走ると同じように、モロー夫人も「発狂」し、「すべてを否認」するに至る。また、『感情教育』の他のプランに、「娼婦になりたいという貞淑な女の欲望²⁴」とフローベールは書き記しているが、これもまた同じように、モルソフ夫人の最期を想起させずにはおかない。

²⁰ *Idem.* <…>は加筆を示す。

²¹ *Carnet 2, f° 5 v° (Carnets de travail, p. 213).*

²² *Idem.*

²³ 『ハレル・ベイ』について、詳しくは『ゴンクールの日記』における 1862 年 3 月 29 日の記述、及び 1877 年 11 月 10 日付のエドマ・ロジェ・デ・ジュネット宛のフローベールの書簡を参照。

²⁴ *Carnet 19, f° 34 v° (Carnets de travail, p. 288).*

『感情教育』の完成稿では、アルヌー夫人は「発狂」することもなければ、「すべてを否認」することもない。また、「娼婦^{ロレット}になりたい」などという願いを抱くこともない。アルヌー夫人の末路に関して言えば、初期の構想は完全に放棄されたと言っていいだろう。ではなぜ、フローベールは初期の構想を放棄したのか。それはおそらく、『谷間の百合』との極端な類似を避けるためであったと考えられる。フローベールはこの初期のプランに、「『谷間の百合』に気をつけること」と書き込んでいるが、この注意書きは『谷間の百合』におけるモルソフ夫人の最期を特に念頭に置いたものであったに違いない。

娼婦^{ロレット}についてはどうであろうか。この初期のプランにおいては、娼婦^{ロレット}は「貞節」で「敬虔」になると、設定されている。このような展開は、バルザックの『浮かれ女盛衰記』やデュマ・フィスの『椿姫』に描かれているような、「真実の愛に目覚めた娼婦」というロマン主義的な娼婦像を連想させる。しかし、『感情教育』の完成稿では、ロザネットは「貞節」にも「敬虔」にもならない。たしかに、ロザネットはフレデリックとの結婚を夢見て、生真面目に振る舞ったりもする。しかし、結局はフレデリックに捨てられて、毛嫌いしていたはずの昔のパトロンと結婚するのだ。「彼女はウドリー氏とかいう男の未亡人になっていて、それはひどい太りようだった²⁵。」アンドレ・ヴィアルが指摘するように²⁶、フローベールは「真実の愛に目覚めた娼婦」というロマン主義の神話を破壊している。

このように、「貞淑なブルジョワ女」と「淫らな娼婦^{ロレット}」の対立関係を転倒させるといふ構想は、小説の完成稿においては完全に放棄されている。しかしだからと言って、小説の完成稿では単純な二項対立が貫かれているのかと言えば、けっしてそうではない。フローベールは『感情教育』において、精神的恋愛と肉体的恋愛の対立をどのように扱っているのか、この問題をこれまでとはまた違った角度から検討するために、次にジャン＝ジャック・ルソンの『告白』を参照することにしよう。

²⁵ *L'Éducation sentimentale*, p. 623.

²⁶ André Vial, art. cit., p. 93.

2. ルソーの『告白』をめぐって

二種類の恋愛

フローベールは、『感情教育』において二種類の異なる恋愛を描くにあたって、バルザックの『谷間の百合』だけでなくルソーの『告白』も参考にしてきた。フローベールは『感情教育』の草稿に、次のように書き記している。

同時に体験される二つの異なる恋愛、二種類の異なる興奮については、ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』第一巻のヴェルソン嬢とゴトン嬢を参照のこと²⁷。

ヴェルソン嬢とゴトン嬢というのは、ルソーが子供の頃に恋に落ちた二人の女の子のことだ。ルソーは『告白』の第一巻で、この二人の女の子と過ごした幸福な時間を振り返っている。

私は、二種類のまったく異なる、本当の恋愛を知っている。両方とも非常に激しいものであるにもかかわらず、共通するところはほとんどなく、また二つとも優しい友情とは異なるものである。私の全生涯は、性質のまったく異なるこの二つの恋愛によって分かれており、私はその二つを同時に経験することさえあった。たとえば、いま話している時期においても、ヴェルソン嬢を公然と暴君のように独り占めにして、他のどのような男が彼女に近づいても耐えられないほどであったのに、その一方で、ゴトン嬢という少女ととても短いけれどもかなり激しい差し向かいの機会があり、その時、彼女は学校の女の先生の役をしてくれるのであった。それだけのことだったが、それだけのことが私にとっては本当にすべてであって、最高の幸福に思われた […] ²⁸。

少年時代のルソーは、ヴェルソン嬢とゴトン嬢と同時に夢中になっている。しかし、この二人の女の子との関係は、その性格をまったく異にしている。「彼女たちが私に抱かせる感情に似たところは何もなく²⁹」と、ルソー自身、書いているように。

²⁷ NAF 17611, n° 119. Cf. NAF 17611, n° 138. 『感情教育』の草稿におけるルソー『告白』への参照について、詳しくはクロディエヌ・ゴト＝メルシュの以下の論文を参照。Claudine Gothot-Mersch, « Rousseau et Flaubert : une source de *L'Éducation sentimentale* dans les *Confessions* », in *Mélanges de littérature en hommage à Albert Kies*, textes réunis par Claudine Gothot-Mersch et Claude Pichois, Bruxelles, Facultés universitaires Saint-Louis, 1985.

²⁸ Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions*, texte établi et annoté par Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, dans *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1959, p. 27.

²⁹ *Ibid.*, p. 28.

ヴェルソン嬢との関係は、「感覚 (sens)」よりも「心 (cœur)」に訴えかける性質のものだ。「彼女 [ヴェルソン嬢] がいないと、彼女のことを考えた、恋しかった。彼女がいて、その愛撫は私の心に気持ちよく感じられたが、感覚には響かない³⁰。」その反対に、ゴトン嬢との関係は、「感覚 (sens)」に働きかける性質のものだ。「ゴトン嬢を目にするだけで、もはや何も見えなくなり、私の感覚すべてが動転させられてしまうのだった³¹。」このように、「心 (cœur)」と「感覚 (sens)」を区別することで、ルソーは二つの恋愛の違いを強調している。

ヴェルソン嬢とゴトン嬢という組み合わせは、アルヌー夫人とロザネットという組み合わせと、類似している。いずれの場合にも、精神的な恋愛が肉体的な恋愛と対比させられているのだ。興味深いのは、『感情教育』のシナリオにおいて二つの恋愛の違いを強調する際、フローベールもルソーと同じように、「心 (cœur)」と「感覚 (sens)」という二つの単語を使用していることである。「感覚はマレシャルに、心はアルヌー夫人に、奪われる³²。」シナリオのこの一文は、フレデリック、アルヌー夫人、ロザネットの三角関係が、ルソー、ヴェルソン嬢、ゴトン嬢の三角関係を下敷きに行っていることを、裏付けている³³。

しかし、この二つの三角関係は、実は似て非なるものである。ルソーは、目の前にいる女の子にいつも夢中で、そこにいない女の子のことを想い出すことはけっしてない。その反対に、フレデリックは、どちらかの女性と一緒にいるとき、そこにはいないもう一人の女性のことをしばしば思い浮かべるのである。『告白』の一節を、まずは引用しよう。

私は言うなれば、この二人の人物それぞれに、すっかり掛かり切りだったので、二人のうちどちらと一緒にいるときにも、もう一人の女の子のことを考えることはけっしてなかった³⁴。

クロディヌ・ゴト＝メルシュがすでに指摘しているように³⁵、フローベールは『感情教育』の第二部において、これとは正反対の状況を描いている。

³⁰ *Idem.* 傍点は引用者による。

³¹ *Idem.* 傍点は引用者による。

³² NAF 17611, ʳ 19 (Cf. Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale. Les scénarios*, édition préparée par Tony Williams, José Corti, 1992, p. 224). 傍点は引用者による。

³³ シナリオのこの一文は、クロディヌ・ゴト＝メルシュの論文では取り上げられていない。

³⁴ *Les Confessions*, p. 28.

この二人の女性との交際は、彼の生活のうちに、まるで二つの音楽を奏でるかのようにであった。ひとつは、陽気で、激しやすく、気晴らしになる、もうひとつは、荘重で、ほとんど宗教的だった。この二つの音楽は同時に鳴り響き、だんだんと調子を高くし、少しずつ混じり合っていくのだった。—— アルヌー夫人が指先で彼にそっと触れただけで、もう一人のイメージがすぐに、彼の欲望の前に立ち現れる。というのも、こちらのほうでは、まだしも見込みがあったからだった。—— ロザネットと一緒にいて、心を動かされるようなことがあると、すぐに至上の恋を思い出した³⁶。

フレデリックがロザネットと出会う前、パリの街はアルヌー夫人を中心とする「巨大なオーケストラ」に喩えられていた。しかし、ロザネットが登場すると、「巨大なオーケストラ」は「二つの音楽」に取って代わられる。「二つの音楽」というこの音楽的比喩が強調しているように、フレデリックはこのとき、二つの異なる恋愛を同時に体験している。その点は、『告白』で語られている少年時代のルソーの経験と変わらない。しかし、フレデリックはルソーとは異なり、一人の女性に「すっかり掛かり切り」にはならない。アルヌー夫人といるときにはロザネットのことを、ロザネットといるときにはアルヌー夫人のことを、思い浮かべているのだ。

『感情教育』ではこのように、二人の女性のイメージが、主人公の頭の中で混じり合う。恋愛小説としての『感情教育』の独創性は、まさにこの点にこそあるのではないか。『告白』や『谷間の百合』においては、二人の女性のイメージが互いに混じり合うようなことは、けっしてないからである。

欲望とイメージ

異なる女性のイメージが混じり合うという現象を、もう少し詳しく見てみることにしよう。フレデリックの想像の中で重なり合うのは、アルヌー夫人とロザネットのイメージだけではない。フローベールは、三人目の女性を登場させることによって、事態をより複雑なものにしている。三人目の女性とはすなわち、ダンブルーズ夫人のことだ³⁷。

小説の第一部において、フレデリックはしばしば、アルヌー夫人とダンブルーズ夫人という二人の女性のイメージを重ね合わせて、夢想に耽る。たと

³⁵ Voir Claudine Gothot-Mersch, art. cit., p. 175.

³⁶ *L'Éducation sentimentale*, p. 240.

³⁷ フレデリックは、アルヌー夫人、ロザネット、ダンブルーズ夫人の三人に加えて、ルイズ嬢とも親しい間柄になる。しかし、ルイズ嬢のイメージを他の三人の女性のイメージに重ね合わせて考えることは、どうやらなさそうである。

えば、ダンブルーズ夫人の愛人になれと親友デローリエから唆されると、フレデリックは無意識のうちにアルヌー夫人のことを想像してしまう。

フレデリックはデローリエには全幅の信頼を寄せていたので、動揺してしまった。アルヌー夫人のことは忘れて、あるいは他の人に対してなされた予言に彼女を当てはめて考えて、思わず微笑した³⁸。

また、フレデリックはシャン＝ゼリゼを当てもなく散歩しながら、ダンブルーズ夫人の乗っていたような「小型の箱型四輪馬車のひとつ³⁹」にアルヌー夫人が乗っている姿を思い描く。第一部ではこのように、異なる二人の女性への憧憬が、ぼんやりと重なり合う。

つづく第二部において、アルヌー夫人とロザネットという二人の女性のイメージがフレデリックの頭の中で混じり合うことは、すでに見た通りだ。第二部の結末においても、この二人の女性のイメージが混じり合うということ、ここでは補足しておこう。第二部の結末で、フレデリックは、アルヌー夫人のために準備したホテルの一室にロザネットを連れ込み、そこで初めて肉体関係を結ぶ。しかし、フレデリックはその後で、アルヌー夫人のことを思って泣くのである。「幸せ過ぎるんだ、フレデリックは言った。君のことを欲しいってずっと前から思っていたから⁴⁰。」フレデリックは、アルヌー夫人を抱いていると想像しながら、ロザネットを抱いていたに違いない⁴¹。

第三部に入ると、事態はさらに新たな展開を見せる。小説の第一部と第二部において、フレデリックが複数の女性のイメージを重ね合わせて考えるのは、無意識のうちにてであった。しかし、小説の第三部に入ると、彼は意識的に異なる女性のイメージを混ぜ合わせて想像するようになる。

まず、ダンブルーズ夫人の愛人になったあとで、フレデリックは彼女に対する幻滅を押し隠すために、アルヌー夫人もしくはロザネットのイメージを強いて思い浮かべようとする。

³⁸ *L'Éducation sentimentale*, p. 65.

³⁹ *Ibid.*, p. 73.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 422.

⁴¹ もっとも、この場面において、アルヌー夫人という「イメージ」がロザネットという「現実」を完全に覆い隠すことはない。だからこそ、フレデリックは涙を流すのだと、考えることもできるだろう。

そのとき、自分自身に隠していたもの、官能の面での幻滅に、はっきりと気がついた。それでも激しい情熱を装った。しかしそれを感じるためには、ロザネットかアルヌー夫人のイメージを思い浮かべる必要があった⁴²。

つづいて、ダンブルーズ夫人とロザネットのあいだで「二重生活⁴³」を送るようになると、フレデリックはこの二人の恋人を意図的に混同して楽しむようになる。

やがて、このような嘘が楽しくなってきた。一方に述べたばかりの誓いの言葉をもう一方にも繰り返して、同じような花束を二人に送り、同時に両方に手紙を書く、そして彼女たちを比較するのだった。——常に三人目の女性のことが頭の中にはあった。彼女をものにできないことが、不実な振る舞いを正当化させていた。こうした振る舞いは、快楽に変化をつけることで、それをさらに刺激した。どちらの女も、騙せば騙すほど、自分のことをさらに愛してくれる。まるで、両者の愛情が相互に刺激し合い、それぞれがもう一人を忘れさせようと競い合っているかのようであった⁴⁴。

この「二重生活」のエピソードは、先に引用した「二人の女性との交際」のエピソードと、対になっている。どちらのエピソードにおいても、異なる二人の女性のイメージが、フレデリックの頭の中で混じり合う。しかし、「二人の女性との交際」のエピソードでは、アルヌー夫人とロザネットの混同は意図せずして生み出されていたのに対し、「二重生活」のエピソードでは、ダンブルーズ夫人とロザネットの混同はフレデリック自身によって意図的に作り出されている。フレデリックはもはや、他の女性のイメージを思い浮かべることによってしか、目の前にいる女性を欲望することができなくなってしまったかのようである。

最後に、アルヌー夫人の最後の訪問の場面においても、フレデリックは似たような振る舞いに及んでいるということを、付け加えておきたい。二人が十数年振りに再会を果たす場面において、フレデリックはこの僥倖に喜びつつも、アルヌー夫人の白髪を目にして、深い幻滅を覚える。その幻滅をやり過ぎそうとして、自分がかつてアルヌー夫人に対して抱いていた思いを、彼は滔々と述べる。

⁴² *Ibid.*, p. 551.

⁴³ *Ibid.*, p. 571.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 573-574.

彼女は、昔の自分に向けられたこの崇拜の言葉をうっとりとして聞いた。フレデリックは、自分の言葉に酔って、言っていることを本当に信じてしまった⁴⁵。

フレデリックはここで、かつてダンブルーズ夫人に対して「官能の面での幻滅」を覚えたときにしたことと、ほとんど同じことをしている。ダンブルーズ夫人に対する幻滅を押し隠すために、アルヌー夫人もしくはロザネットのイメージをかつて思い浮かべたのと同じように、現在のアルヌー夫人に対する幻滅をやり過ごすために、過去のアルヌー夫人のイメージをここでは呼び起こしているのである。もちろん、異なる女性のイメージか同じ女性の過去のイメージかという違いはあるが、イメージを喚起することによって、目の前の女性に対する欲望を奮い立たせようとしている点では、同じだろう。

以上の経緯を簡単に整理しておこう。第一に、フレデリックの頭の中では、複数の女性のイメージが次から次へと混じり合う。第一部ではアルヌー夫人とダンブルーズ夫人、第二部ではアルヌー夫人とロザネット、第三部ではロザネットとダンブルーズ夫人、といった風に。複数の女性のイメージが重なり合うことによって、フレデリックの欲望はますます激しいものになる。第二に、フレデリックは目の前にいる女性に対して幻滅を覚えたとき、そこにはいない女性のイメージを喚起している。ダンブルーズ夫人の前ではアルヌー夫人もしくはロザネットのイメージを思い浮かべ、白髪のアルヌー夫人の前では若くて美しかった日のアルヌー夫人のイメージを呼び起こす、といった風に。イメージによって現実を覆い隠すことによって、フレデリックは幻滅から逃れようとしているのである。

3. 理想と売春

『感情教育』と『谷間の百合』の比較に戻ろう。この二つの小説の最も重要な共通点は、青年と既婚女性が互いに惹かれ合いながらも、肉体関係は最後まで結ばないままで終わる、ということではないだろうか。『赤と黒』や『ボヴァリー夫人』といった、いわゆる「姦通小説」とは異なり、この二つの小説では、男女が一線を越えることはけっしてないのである。『谷間の百合』と『感情教育』の比較を締め括るにあたって、性的関係の不在という問題に、最後に注目することにした。

⁴⁵ *Ibid.*, p. 619.

『谷間の百合』と『感情教育』において、男女がついに肉体関係を結ばないで終わるのは、女性の側が誘惑に負けずに貞節を守り抜いた結果であると、ひとまずは考えることができる。この点に関連して興味深いのは、どちらの小説においても、子供の病気が母親を思い留まらせる役割を担っているということである⁴⁶。『谷間の百合』のモルソフ夫人は、最期にフェリックスに宛てた手紙の中で、子供たちの病気は「神の戒め」であると自分には思われたと告白している。「ジャックの病とマドレーヌの苦しみは、迷える子羊を自分のほうへと強く引き戻そうとする、神の戒めであると、私には思われたのです⁴⁷。」『感情教育』のアルヌー夫人は、子供の急病によりフレデリックと街で会う約束を破ってしまうが、その回復後、病気は「神の警告」であったと考える。「これは神の警告であったのだ。 […] もしこの愛にあくまで執着していたら、あとでどんな報いを受けることになっていたことだろう⁴⁸！」このように、モルソフ夫人とアルヌー夫人は、それぞれ誘惑にさらされながらも、子供の病気に「神の戒め」ないし「神の警告」を読み取ることで、あくまでも貞節を守り抜く決心をする⁴⁹。

しかし果たして、本当にそれだけだろうか。この二つの小説において、男女が性的な関係を最後まで持たないままで終わるのは、むしろ男性の側がそれを望まなかったからではないだろうか。フェリックスとフレデリックは、相手の女性の理想的なイメージに執着するあまり、その肉体としての存在を拒絶しているのではないか。

まずは、『谷間の百合』から振り返ってみよう。モルソフ夫人は「魂の伴侶」、ダドレー夫人は「肉体の愛人」という風に、フェリックスが二人の女性を明確に区別していることは、すでに見た通りだ。このような区別の仕方は、必然的に、モルソフ夫人の肉体を無視することに帰着する。「魂の伴侶」などという都合の良いイメージを、相手に一方的に押し付けることによって、フェリックスはモルソフ夫人が胸奥に宿している欲望を、否定しているのである。しかも、その欲望を掻き立てたのは、自分自身であるにもかかわらず。

⁴⁶ Voir André Vial, art. cit., p. 281.

⁴⁷ *Le Lys dans la vallée*, p. 1218.

⁴⁸ *L'Éducation sentimentale*, p. 419.

⁴⁹ サント＝ブーヴの『愛欲』とスタンダールの『赤と黒』においても、子供の病気は「神の戒め」あるいは「神の警告」として描かれている。『愛欲』の第十八章、及び『赤と黒』の第一部第十九章を、それぞれ参照のこと。

『感情教育』の場合はどうだろうか。フレデリックがアルヌー夫人の理想的なイメージを守ろうとして、その肉体としての存在を拒絶するのは、二人が十数年振りに再会を果たす場面においてである。

フレデリックはアルヌー夫人が身を任せるために来たのではないかと思った。そして、かつてないほど激しい、獐猛で、熱狂的な欲情に駆られた。しかし、何か言うに言われぬもの、ある種の反発、近親相姦の怖れのようなものを、感じた。もうひとつの不安、あとになって不快感を抱くのではないかという不安が、彼を引き留めた。それに、とんだ厄介事になりかねない！——用心のためと理想を汚したくないという思いから、彼は踵を返して、煙草を巻き始めた⁵⁰。

フレデリックは、アルヌー夫人が「身を任せる」ために来たのと勘付きながらも、「理想を汚したくない」という思いから、欲望を自制する。フレデリックがここで、自分の目の前に存在する現実のアルヌー夫人よりも、彼女に対して自分が抱いている理想的なイメージを優先していることは、明白だろう。彼は、現実のアルヌー夫人を拒否して、その理想的なイメージを守ることを選ぶ。残された人生において、彼女の美しい姿を、躊躇なく反芻することができるように。

このように、フェリックスとフレデリックは、「現実」よりも「イメージ」を優先しているという点で、共通している。二人が最愛の女性と肉体関係を結ぶことに必ずしも積極的でないとすれば、それは「現実」によって「イメージ」が損なわれてしまうことを恐れているからだ。二人にとって何よりも重要なのは、「現実」から「イメージ」を守ることである。

しかしここで、両作品の違いも強調しておかなければならない。フェリックスとフレデリックが「現実」よりも「イメージ」を優先するのは、必ずしも同じ理由からではないからだ。フェリックスは「現実」よりも「イメージ」を優先するにあたって、心身二元論に依拠していると言える。つまり、神聖で崇高なモルソフ夫人というイメージを守るために、その肉体としての存在を切り捨てているのだ。フレデリックが「現実」よりも「イメージ」を優先するのは、心身二元論に依拠してのことではない。それはむしろ、過去のアルヌー夫人のイメージを現在のアルヌー夫人から守るためである。精神／肉体から過去／現在へと、対立軸がずらされていることに、まず注意しておきたい。

⁵⁰ *L'Éducation sentimentale*, p. 620.

また、アルヌー夫人の最後の訪問の場が、小説の結末で語られる「トルコ女の家」のエピソードと呼応していることも、忘れてはならないだろう。小説の結末で、フレデリックとデローリエは、コレージュ時代のある夏休みの思い出を語り合う。その思い出とは、「トルコ女の家」と呼ばれる娼館へ二人で行こうとして、しかし目的を達成できないまま、逃げ帰って来てしまったというものだ。この情けない思い出を語り終えた後で、フレデリックが「あの頃がいちばんよかったな⁵¹！」と述べ、デローリエもその同じ言葉を繰り返して、小説は幕を閉じる。

フレデリックとデローリエが「トルコ女の家」を懐かしく回想するのは、娼婦を買うという二人の試みが失敗に終わったからに他ならない。つまり、「トルコ女の家」に対して抱いていた「イメージ」が、その「現実」によって、幸いにも傷つけられることがなかったからこそ、二人は何十年も経ってからも、この娼館を懐かしく回想することができるのだ。もし二人が娼婦を買うことに成功していたとしたら、その思い出をわざわざ懐かしむようなことはなかっただろう。

フレデリックがアルヌー夫人とついに肉体関係を結ばなかったことと、彼がコレージュ時代の夏休みにデローリエと訪れた「トルコ女の家」で目的を達せられなかったことのあいだには、ある種の照応関係が成立している。いずれの場合にも、性的な関係が実現しなかったことによって、「イメージ」が「現実」の侵食を免れるのだ。興味深いのは、半生を捧げたプラトニックな恋と思春期の性的なオブセッションが、同列に置かれているということである。アルヌー夫人という理想的な女性のイメージと「トルコ女の家」という売春のイメージが互いに呼応し合うという、まさにこの点にこそ、フローベールの小説の妙味があるのだ。

おわりに

本論では、フローベールの『感情教育』を、バルザックの『谷間の百合』、さらにはルソーの『告白』と比較することによって、この作家が過去の作品との対話の中からどのようにして新しい作品を生み出したのかを、明らかにしようと試みた。フローベールは、『感情教育』において二種類の異なる恋愛を描くにあたって、『谷間の百合』と『告白』をそれぞれ参考に行っている。しかしそれは、バルザックやルソーを模倣するためではなく、むしろこの二

⁵¹ *Ibid.*, p. 626.

人の作家に対して意識的に距離を置くためであった。実際、フローベールによる二種類の異なる恋愛の描き方は、きわめて独創的なものであると言える。『谷間の百合』や『告白』においては二人の女性のイメージは常に明確に区別されているのに対し、『感情教育』においては二人の女性のイメージはしばしば重なり合っている。

また、『谷間の百合』及び『告白』との比較を通じて、『感情教育』における欲望の法則とでも呼ぶべきものを明らかにすることができた。その法則とは、以下の二点に要約されるものだ。第一に、『感情教育』において、イメージは欲望の生成と増幅を促す。フレデリックの想像の中では、複数の女性のイメージが重なり合い、その結果として彼の欲望はますます激しくなる。第二に、『感情教育』では、イメージはしばしば現実にとって代わる。フレデリックは、欲望の対象そのものよりも、その対象に対して自分が抱いているイメージを、優先してしまうのである。フローベールの「現代性」とは、現実に対するイメージの優位をこのように描いてみせた点にこそあるのではないだろうか。